

居所にはあらざりけるなめりとなんとぞかたり侍し、
〔類聚名物考 地理三十七〕關の清水

略○中

關の清水の事は、今年京都にあそびて三井寺のゆきかひに、逢坂の關山をいく度か越るにつきて、關の清水の地ゆかしくて、尋ねたる事有りしに、まづ土俗の云ひ傳へし所二所あり、今うちまかせて人の覺えしは、大津宿此所を八町といふなりより京の方へよりて道の北に左より下れば關清水大明神といふ社あり、石の鳥居立たり、その社の前に石を疊みて、清水の出る所有り、是を御香水と名付て、目を病人、此水にてあらふ事なり、その水洞の如く上を、かこひは一間四方ばかり、深さ三四尺も有るべし、甚だ清らにすみて、底に徹て見ゆ、是誰も知る所なり、さて又一所は此水より猶京の方にて、道の兩傍に山のせまる所在り、今は片方は町家に、是古への關山なる事疑ひなし、實に孔管道とも云ふべくして、關おかれんには、此所にこそ有るべけれ、山の間わづかに十間に過す、京より下るに、右の方に山の麓にそひて石垣有り、その盡るほどばかりに又家並有り、此を井ふい、その北の山の下に京より左の方には 南無阿彌陀佛の名號ゑりたる石塔あり、高さ八尺ばかり、その前に石の井あり、二尺あまり四方にて、水もあさくた、へけり、是を俗には弘法大師の加持水とて、めぐりに垣ゆひ廻し、常には蓋うちさせたれば、かりそめの往來には見えず、車道のむかひ山 此水も眼やむ人の薬とす、花香など手向る人ありと見ゆ、或老人の語りしは五十年ばかりの昔、此石塔のかたはらに、二抱ほどの櫻の大木有りしが、ある年の大風にたふれて、此塔のうへさまにかゝりし故塔もこけたりしが、その塔の下に此清水ありて古井のさまなり、是ぞ古への關の清水にして、此事知人まれなりと語りぬ、今はその井筒を前にして、塔をばむかひさまへ居えたる、今思ふに、初の大津の宿よりは、十町ばかりも東に有るべし、此所關の舊跡と見ゆれば有る所はよろしきに似たり、されども賀茂長明の無名抄に、關の清水の事を出して、山中に有るよしい